

1 朝鮮古刊本

書誌学上では、李朝時代に朝鮮半島でつくられた書物を朝鮮本と称しています。本館では朝鮮本を46部262冊所蔵しており、すべて16世紀以前に刊行された古刊本です。ここではその中から2冊をご紹介します。

- (1)『二倫行実図』は、儒学で重んじられる「長幼」「朋友」の二つの徳目を図と漢文・詩によって示した説話集で、同じく朝鮮古刊本である『三綱行実図』に続く内容です。欄外には漢文と同じ内容がハングルによって記されています。
- (2)『尉繚子直解』は古代中国の兵法書『尉繚子』の注釈書です。中央政府によって銅活字で印刷されたもので、この書物が国王から臣下へ下賜されたことを示す記録(内賜記)が第1冊の前表紙裏に墨書されていることも特筆されます。

2 環海異聞(写本)

寛政5年(1793)、水主・津太夫をはじめとする乗組員16名を乗せて石巻港から出発した若宮丸が遭難し、アリューシャン列島に漂着して以後、文化元年(1804)に4名が長崎に帰着するまでの12年に及ぶ異国での体験をまとめたのが本書です。

編者の大槻玄沢・志村弘強は、帰国した津太夫らに対して江戸藩邸で聴聞を行った後、執筆・編集作業に入り、文化4年(1807)夏に脱稿。当時鎖国下にあった日本にとっては稀有なこの体験を文章と詳細な彩色画で記録しています。津太夫一行は、レザノフを使節とする遣日ロシア使節団に同行して日本に向かう途次、大西洋・赤道・太平洋をめぐり、沿岸諸国に立ち寄り、結果としてはじめて世界一周した日本人となりました。この記録は、単なる漂流記ではなく、外国地誌や日露交渉史などの面からも記念すべきものと言えます。

5 奥州名所図会(自筆稿本)

仙台大崎八幡宮の神官で、和歌や俳諧などにも秀でていた大場雄淵(宝暦8年(1758)~文政12年(1829))が執筆した本書は、江戸期仙台領の名所・風物などを詳細な文章と絵図で描いたものです。題名には「奥州名所」とありますが、内容は仙台領内に限られています。仙台領を対象とした地誌・名所図会類は数点が確認されていますが、本書はその豊富な情報量において、特に的確な描写がなされた絵図は他に類を見ないものです。中でも塩竈神社を中心とする淡町の風物や瑞巖寺を中心とする松島の景観は、画文ともに詳細を極めています。また、出版される以前の稿本であるため、絵図や解説文の補足、絵師への指図や、朱字または白色上塗りの訂正箇所が本文に見られ、当時の編集作業の一端をかいま見ることができま

6 熟語本位英和辞典(自筆原稿)

筆者の斎藤秀三郎(慶応2年(1866)~昭和4年(1929))は宮城県出身の英語学者で、『斎藤和英大辞典』『熟語本位英和中辞典』などの膨大な量の辞書、文法書を著したことで知られ、その著作は今なお有益なものとして残っています。この自筆原稿は、A4変型判の罫紙様の用紙1086枚にもなるもので、タイトルとして「Saito's Idiomatic English=Japanese Dictionary 熟語本位英和辞典」と記されています。この『熟語本位英和辞典』は、全4640ページに及ぶ『斎藤和英大辞典』の対になるものとして斎藤が執筆していたものですが、斎藤の死によってfの項の単語“flog”を最後として未完に終わりました。現存する斎藤の自筆原稿は極めて少なく、日本における英語学の歴史を知る上でも貴重な資料です。

7 仙台祭絵関係資料

江戸時代、毎年9月に行われた仙台東照宮の祭礼は「仙台祭」と呼ばれ、大勢の参詣客でにぎわった年中行事でした。仙台祭では、各町内から出される華やかな渡物(山車)が呼び物となっており、祭礼の様子を描いた墨摺りの版画はみやげものや記念品として人気を集めました。

(1)『寛政三年仙台東照宮権礼絵』は、寛政3年(1791)に催行された祭礼における渡物本体を大きく描いた版画10葉が貼りこまれた折帖で、1枚につき1台の渡物の全体像が再現されており、画面には「持統天皇天の香具山にて詠歌の躰」といった題名と担当の町名・屋号があわせて記されています。

また(2)『仙台東照宮御祭礼図』は小絵図10枚を貼りこんで巻子本に仕立てたものです。これは祭礼の一行を図示したもので、先陣に始まり、各町内の渡物、獅子・神輿の行列や見物人までもが描かれています。渡物の題材が(1)と共通していることから、二つの資料は同年代の作である可能性が指摘されています。

寛政三年仙台東照宮権礼絵

仙台東照宮御祭礼図

8 北極出地度里程測量(写本)

本館では、伊能忠敬の測量隊が作成した日本図(『伊能図』)を所蔵しており、平成15年7月に県有形文化財に指定されています。「北極出地度里程測量」は、『伊能図』と同等の資料価値を有するものと認められることから、平成17年に追加指定されたものです。

文政6年(1809)ころ成立したと見られるこの資料は3冊から成り、近畿・四国・中国地方の北極出地度(緯度)、里程(距離)が記載されています。これは、本館所蔵の『伊能図』第6図(近畿)、第7図(中国沿海)の範囲が含まれており、伊能忠敬の第5次および第6次測量の結果得られた測量値と考えられます。これらの測量値は本来地図に記載されるべきものですが、何らかの理由によって冊子の形態にまとめられたものと見られます。

北極出地度里程測量

二倫行実図

尉繚子直解

特集

「さらめく文化財の世界」パート3

宮城県図書館が進めている「22世紀を牽引する叡智の杜づくり」事業では、「貴重書の修復・活用プロジェクト」の一環として、専門調査員による貴重資料の体系的学術調査事業を行っています。この調査に基づき、平成16年度に1件262点、17年度には6件35点の資料が県有形文化財の指定を受けました。この特集では第14号・第15号に続いて本館所蔵の文化財の世界をご紹介します。

3 金城秘韞(写本)

伊達政宗が慶長18年(1613)秋に派遣した「慶長遣欧使節」は、近世外交史上において画期的な事業でした。『金城秘韞』は、この「慶長遣欧使節」に関する資料と将来品について大槻玄沢が精査した記録をまとめたもので、江戸末期の写本です。上巻では、『貞山公治家記録』を中心とした政宗関連資料を解説・分析しており、当時蘭学の第一人者であった玄沢の学識の高さがうかがえます。下巻では使節団が持ち帰った資料群を、図を交えて記録しています。使節団が持ち帰った品々は、その大半を支倉常長が所有していましたが、支倉家断絶に伴い藩切支丹所に移管されており、玄沢はこれらの資料を文化9年(1812)に実現して内容をほぼ正確に解明しました。下巻に収録されている図の数々は、国宝である「慶長遣欧使節関連資料」(仙台市博物館所蔵)の江戸期における状況を伝えるものとして重要視されています。

4 英文翻訳彼理日本紀行(稿本)

1857年、ニューヨークで出版された『ペリー提督日本遠征記』のなかの日本における見聞を記した「Expedition to Japan」の邦訳です。原著には図が多く挿入されていますが、本書ではペリーの肖像画1枚のみが収録されています。

跋文の記年は文久3年(1863)となっており、アメリカでの原著出版から6年後にあたります。日本の開国に大きな影響を及ぼしたペリー提督の記録を、当時としては非常に早い時期に大槻磐溪が主導して翻訳を進めたものであり、磐溪を中心とする集団が開明的な見地に立っていたことが分ります。

なお、原著は、本書と同じ大槻文庫として本館に所蔵されていますが、印記などから見てその原著を元に翻訳作業が行われた可能性が指摘されています。

《叡智の杜》レポート 巡回貸出を利用した古典の授業が行われました

宮城県図書館では、県内の公共図書館や高等学校を対象に、古典の複製資料のセットを巡回貸出する事業「古典への誘い」を昨年度から行っています。10月4日から19日にかけて、涌谷高等学校でこの複製資料を使った古典講読の授業が行われました。秀逸な古典作品に直接触れることにより、悠久な歴史の重さを感じてもらおうと同高校の小野寺基好先生が計画したものです。教材として使われたのは『万葉集』『源氏物語』『奥の細道画巻』など、生徒たちにもおなじみの古典の数々。複製資料を出発点として、書かれている文字の解説・臨書に挑戦したり、文学史上の位置を年表で表現したりと、さまざまな角度から古典作品について学びました。「今までの授業とは違ってひとつひとつの作品をより深く知ることができた」「とても貴重な体験ができ、昔の人になったような気がした」など、古典を読む喜びが感じられる声が生徒たちから聞かれました。

